

# 「科学」フェティシズムと創造的想像力<sup>(1)</sup>

——ライトミルズの社会学的想像力に

ついでの一考察——

伊 奈 正 人

## 一. 問題の所在

ライトミルズがそのエネルギッシュなしかし短い生涯を終えて20年がたとうとしている。その間彼はさまざまな形でとりざたされてきた。——そのなかで彼のアメリカ社会の現状批判，社会学批判および問題提起の真剣を，するどさ，それによる彼の名声をもとめつつも，その理論的性急さ，定式化の不足がゆえに彼の社会学は彼とともに死んだとするものもたしかに多い<sup>(2)</sup>。しかし他方ホロヴィッツ以来彼の社会学の一貫性を主張する努力はなされてきているし<sup>(3)</sup>，また彼の社会学の社会学，イデオロギー論等を理論的に継承し発展させようとする努力もなされている<sup>(4)</sup>。さらにまた今日の新しい冷戦 (cool war) という状況下で，彼の提起した理論的問題をいま一度検討しなおす必要もとかれはじめた<sup>(5)</sup>。

これらの趨勢はすぐれて現代の科学技術と知識人・科学者の問題とからみあっており，その解決を志向するものである。われわれもこのような現況をふまえ，ミルズを単なるエリート主義の大衆社会論者としてかたづけてしまうのではなく，彼の政治社会学，知識社会学を理論的に再検討する必要があるのではないか。本稿ではこのような問題意識にたち彼の方法論的中心概念たる「社会学的想像力」について考えてゆく。

周知の如くこの概念はアメリカ大衆社会における社会学の閉塞状況に危機感をいだいたミルズが『社会学的想像力』において導入したものである。その批判は苛烈をきわめ一大センセーションをまきおこした。だがその反響のむしかえしはここでの課題ではない。ここでの問題は次の二点である。——その第一は

ミルズのとらえていた「社会学」の論理の解明である。すなわちミルズが「社会学」を、そしてその「閉塞状況」を社会的文脈との連関においてどのようなものとしてとらえていたかということ。そして第二にはミルズの「社会学批判社会学」の論理の解明。言い換えるならば「社会学」の「閉塞状況」を打開するものが何故社会的な想像力になるのかということである。

- (1) 筆者は想像力を次の4つに分類して考える。Ⅰ①創造的想像力②再生的想像力Ⅱ③構想的想像力④幻想的想像力。Ⅰはカルテジアンによって区別されたもので、①がこれまで考えもつかなかったようなもの、認められなかった関係を想う力。②が表象を再生する力と定義される。Ⅱもカルテジアンが区別したものだが、④はカントらにうけつがれた悟性と感性を媒介し認識をたすけるもの。④はアラン等にうけつがれたもので、認識をあやまらせるものとそれぞれ定義される。この①～④は社会の分化、官僚主義化とともに社会的意味をもって分化してくるのである。すなわち認識をまどわすステレオタイプの再生、蔓延とそれを打破し人間的社会を構想、創造する想像力の要請。一筆者はこの類型を現状変革・現状維持の志向性をめぐる時間軸(Ⅰ)と主観的・客観的認識をめぐる空間軸(Ⅱ)との「準拠」という考え方を用いて理論化を試みようとしているが、ここではまだそうした概念的意味をこめて用いていない。ここではただミルズの想像力論が人間的未来への志向性をもつものの、現実への絶望がゆえにそれを理想化してしまっただけという長短両面をあらわそうとしただけである。(上記理論についてはいずれ稿をあらためたい。)
- (2) Tumin, Mervin "Review of Power Politics and People" *American Sociological Review* Vol. XXIX No.2 (Feb. 1964)
- (3) Horowitz, I. L. "An Introduction to C. Wright Mills" *Power Politics and People: The Collected Essays of C. Wright Mills* 1963. Horowitz "The Intellectual Genesis of C Wright Mills" *Mills Sociology and Pragmatism* 1963 Scimecca, Josepha *The Sociological Theory of C. Wright Mills* Ph. D. Dissertation New York University 1972 Jones, Robert Paul *The Fixing of Social Belief: The Sociology of C. Wright Mills* Ph. D. Dissertation University of Missouri-Columbia 1977.
- (4) Gouldner, A. W. *The Coming Crisis of Western Sociology* 1970 *od. The Dialectic of Ideology and Technology* 1976.
- (5) 陸井三郎「ミルズ著『第三次世界戦争の原因』を読みなおす」『思想の科学』No.128 1981 Thompson, E. "Notes on Exterminism, The Last Stage of Civilization" *New Left Review* No.121 May-June 1980.

## 二、「科学」フェティシズム

ミルズは「社会学」の論理を一種の「科学」フェティシズムとして批判していたと思われるが、まず最初にその社会学批判を、『社会学的想像力』にあたり要約しておこう。

①. 「誇大理論」(Grand Theory)<sup>(1)</sup>: ミルズは『社会学的想像力』の第2章でパーソンズの『社会体系論』を批判している。そこでの彼の批判のやり方はきわめて辛辣なもので「パーソンズ語」で書かれた文章を「英語」に翻訳してゆくという「やり方」がとられた。どうしてかようなやり方がとられたのか。ミルズは章のはじめに次のような問題提起を行なう。——パーソンズの書物はきわめてわかりにくいものである。社会学者たちはそのような書物の理解に非常に多大な労力をついやしている。そしてだれもがその業績を絶賛してやまない。たとえわからなくても……。それではそこには社会学の歴史を一步も二歩もすすめるような業績がふくまれているのか。それとも内容のない「裸の王様」にすぎないのか。そうミルズは問いかける。そして「王様は裸だ」と言った子供たちの如くミルズは次のように言う、パーソンズの500ページにもおよぶ「労作」もわかりやすい表現を用いれば75ページになってしまうと。そうして自ら「翻訳」を試みてゆく。このようにミルズのパーソンズ批判の第一点はかようなわかりやすさの欠除、あいまい主義であった。それではこのようなあいまい主義を前面にださしむるのは何であろうか。それはパーソンズに存する過度の一般理論志向である。すなわちあまりに一般的な超マクロ的次元で思考を行なうため具体的な観察の次元までおとこられなくなってしまうことである。したがって意味論的次元のことはまったく無視され、もっぱら理論体系内部の統語論的次元のみに関心がおかれる。(パーソンズ語!) その結果概念の物神化がひきおこされ「諸々の概念は大文字の概念(Concept)になっている。(傍点筆者) このようにして誇大理論は歴史的社會構造の問題を看却し、超歴史的な概念的な世界を構築する。そしてその「社会変動論」は均衡論の観点からのスタティックな非歴史的な形式主義になり下がっている。このようにミルズはパーソンズの構造機能主義を批判している。

②. 「抽象化された経験主義」(abstracted empiricism)<sup>(2)</sup>: 次に第三章でと

りあげられるのは「抽象化された経験主義」である。これをミルズはそれ以前にも「高等統計学者」として批判しているが<sup>(3)</sup>、そこであつかわれた論点をミルズはここでは一步すすめた形で提出している。そのかなめとも言ふべきは「**方法論的禁制**」(methodological inhibition)という概念の措定である。——すなわちこの者たちはかつてミルズによって次のようなものとして、近代物理学の発展とか成功を前提として、物理学の検証モデルを絶対化し、それによってあつかえるせまい範囲の問題(tiny niches)ばかりとりあつかうものとして批判された。「**方法論的禁制**」は、この論点を一步すすめて、「方法によって問題は規定される」という「科学哲学」による哲学的偽装をほどこし、社会探求を禁制することを意味する。これによって「**抽象化された経験主義者**」は公的な関連をもつ重要な問題をさけ、**超分子的**スタイルでそれとは無関係の些末な問題ばかりとりあつかうことになる。社会探求の対象は真か偽か判断がつかなくなるほど**細分化**され——そして**もっぱら意味論的次元**ばかりが強調され——その探求が扱う問題が重要なものであるかとは一切別に無意味な結果だけがただ積みあげられてゆく。しかも彼らはこのような無意味な研究成果をつみあげてゆくことによって、やがてそれが成熟した科学に成長するだろうという幻想を信じきっている。かくして「科学」的方法、統計的方法是「**ヤームス**」と化し、ひとりあるきするようになる。すなわち一方で「科学」ないし「方法」の**物神化**がひきおこされ、たんなる科学・方法が**大文字の科学・方法**(Science, Method)と化し、他方で科学者はその「方法」によって**召命**された問題のみをとりあつかい「ヤームス」の「啓示」を解釈するものに墮することになる。このことは重要な社会問題に対する「免罪符」発行に他ならない<sup>(4)</sup>。

③。「**実用**」性<sup>(5)</sup>：第3章では現代社会学における「**実用**」性が批判されている。そこでミルズはリベラルな実用性リベラルでない実用性とを区別する。すなわち個別的で多様な目的に役だつ実用性と巨大な諸制度の目的にのみ役だつ**画一化**された実用性とを区別する。そして社会学のもっている実用性が前者から後者へ**転換**され**固定化**されていることを批判する。このことは実用性の**大文字化**(Practicality)批判に他ならない。

そしてミルズはこれら①～③がパワーエリートによる官僚制支配をたすけ、

文化、道徳などさまざまな領域に官僚制エートスをひろめる官僚制イデオロギーと化しているとする。このようにミルズは「誇大理論」を「概念」の物神化として、「抽象化された経験主義」を「方法」の物神化として、「実用」主義を「実用性」の画一化として批判した。そこで骨子となっているのは「大文字化」ということである。そしてこの点にミルズの「科学」フェティシズム把握があったのである<sup>(6)</sup>。

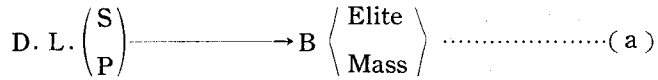
『社会学的想像力』におけるアメリカ社会学批判の要旨は以上のとおりである。これをふま次に大衆社会における科学と科学者という観点からミルズのとらえていた「社会学」の論理を再構成してゆくことにしたい。それはミルズの「科学」フェティシズム把握を「大衆社会論」等の関連で把握する作業に他ならない。そこでは(a), 社会的文脈, (b), 「科学」者, (c), 「科学」それ自体, という三者の連関が明らかにされねばならないであろう。

(a). 社会学の社会的背景をなす社会的文脈はミルズによって展開された「大衆社会論」において解明された。——資本主義の発展にともない分業(D, L)が展開され、職業はさまざまな形で「専門分化」(specialization : S)「専門職化」(professionalization : P) されていった。その過程で形式的合理性が一面的に追求されてゆき、官僚主義化(B)がなされるようになる。

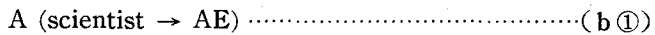
このような官僚制支配機構の展開はすぐれてビックビジネス (=独占資本) の論理につらぬかれたものであり、「パーソナリティーの市場」における「ビジネスユニオンズム」, 「生産制限」(sabotage, 健全な生産の疎外), 「消費者の生産」による大量消費社会=過剰開発社会(「ゆたかな社会」) などをもたらす。そして「有効需要の創出」は必然的帰結として軍事産業という領域に——はじめは偶然にそして故意に——その場を見出す。しかもこれらは法, 慣習, 制度上保証されたことなのである<sup>(7)</sup>。かくして「不況—戦争—好況というアメリカ史のリズム<sup>(8)</sup>」がかもし出されることになる。

さらにこのような社会においてはさまざまなイメージ, 文化, 価値(真, 善, 美), 道徳等が画一的に「文化装置」をとおして与えられる結果, 「官僚制エートス」は人々に深く浸透する。——そこではかつての理性, 自由, モラルのない手としての「公衆」はなくなり, 一方で巨大な制度の支配者たるエリート

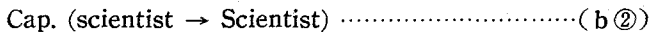
(軍事, 政治, 経済), 他方で「陽気なロボット」たる「大衆」という支配関係が固定化される<sup>(9)</sup>。



(b). (a)を背景として, かような文化装置のにない手としての, 科学者の世界においても「専門分化」「専門職化」がなされ, さらに官僚主義化がなされてゆく。すなわち官僚制は科学者たちの生活条件をととのえ, これを操作・管理するようになり, 科学者は科学者で企業, 国家等パトロンのニーズにこたえ, その「生産物」を売るようになる。このように科学者は「学問的企業家<sup>(10)</sup>」(Academic Entrepreneur: AE) になり下がる。この結果科学者の主体制は失われ疎外された存在(A)になってしまう。



一方科学者は企業, 国家等パトロンの意にかなうよう, 巨大な制度のみに役にたつような研究をもっぱら行ない, あるいは「あいまい主義」によって, あるいは「方法論的禁制」, 「些末主義」によって重要な問題を解消してしまうようになる。科学者はもはや自由な立場から, さまざまなしかたでアメリカの自由, 理性をまもるために発言することはない。「科学者像」は所与のものとして画一的に巨大な制度によってさだめられている。それを受容すべく教育された彼らは, ただ形骸化されたレトリカルな「リベラリズム」, 形式的な「理性のまもり手として口をそろえて発言するだけである。このような「科学者」のイメージ, 科学者の自己意識は, 巨大な社会機構の中にくみこまれ, 画一化されているわけであり, したがって「科学者」は大文字化(Cap.)されている。



このように「科学者」は一方で科学者それ自体の連関において疎外された存在となり, 他方で大衆との連関においては「大文字化」されている。

(c). (a)を背景として「科学」は官僚制イデオロギーとなっている。あるいは概念(con)の物神化, 大文字化によって, あるいは方法(m)の物神化, 大文字化によって, またあるいは実用性(pra)の物神化, 大文字化によって……。そしてその結果, 人間や社会についての探求は矮小化され, 重要な問題は解消さ

れてしまう。このように「科学」は一方で大衆、科学者の上に君臨する物神であり、他方で、権力エリートのニーズに対応する商品である。ここに表出する「社会学の論理」は「科学」フェティシズム (SF), 「科学」の大文字化に他ならない<sup>(11)</sup>。

Cap ((science → Science)(con → Con)(m → M)(pra → Pra)…) SF  
 ……………(c)

上の(a)~(c)をまとめ「社会学」の理論すなわち「科学」フェティシズムをその全体的連関において図示するならば下のようになるであろう。

$$D. L. \begin{pmatrix} S \\ P \end{pmatrix} \longrightarrow B \begin{pmatrix} \text{Elite} \\ | \\ \text{Mass} \end{pmatrix} : \left\{ \begin{array}{l} \text{Cap (Con, M, Pra}\dots) \\ A (A.E), \text{Cap (Sci)} \end{array} \right\} S. F$$

- (1) Mills, C. W. *The Sociological Imagination* 1959 p.p. 25~49 (以下 SI)
- (2) SI p.p. 50~75.
- (3) Mills “IBM Plus Reality Plus Humanism=Sociology” 1954 *Power Politics and People* (以下 P. P. P.)
- (4) 高橋徹「教育実践のための社会調査」『教育』1955年5月
- (5) SI p.p. 76~99.
- (6) 記号論の観点からみるとこのことは記号環境が「統語論」「意味論」「実用論」という記号の三つの次元すべてにおいて画一化、大文字化がなされていることを意味する。
- (7) この点においてミルズはウェーバーとヴェブレンを重ねあわせ理論構成を行っていたことがうかがわれる。Cf Gerth, H.H. “C. Wright Mill’s 1916-1962” *Studies on the Left* Vol.2 No.3 1962 Veblen. T. *Absentee Ownership and Business Enterprise in Recent Times: the Case of America*, 1923 Chap. X Chap. XI Horowitz, I. L. “An Introduction to C. Wright Mills” P. P. P. p. 8.
- (8) ミルズ『新しい権力者』1948 (河村望/長沼秀雄訳) p. 9.
- (9) 以上(a)は Mills *White Collar* 1951 *Power Elite* 1956 SI および “Cultural Apparatus,, P. P. P. p. 405 f. 参照。
- (10) Veblen *The Higher Learnings in America* 1918.
- (11) 以上 (b)(c)は *White Collar* SI および “Cultural Apparatus” op. cit. 参照。

### 三. 社会学的想像力

以上のようにミルズは「科学」フェティシズムとして「社会学」の論理をとらえ、それを批判した。「社会学的想像力」はそのアンテーゼとして出されてきた概念である。この節ではこの概念について次のような分析を行なってゆくこととしたい。(1)、「社会学的想像力」とは何か？ それはミルズによってどのように説明されているのか。(2)、何故「社会学」の論理のアンチテーゼが「社会学的想像力」でなければならないのか。

(1). ミルズは『社会学的想像力』第一章において、この「社会学的想像力」という概念についてさまざまな角度から説明を加えている。そこでまず最初にこの文脈にそって内容を簡単にみてゆくことにしたい。(ア)、一般の人々の生活は全体社会の構造的なさまざまな変化に支配され、自分にとって巨大な歴史的状況がどんな意味をもっているか理解できなくなっている。さまざまな情報が氾濫し、それが「かれらの注意力を支配し、むしろ情報を消化する能力を圧倒し去ることが多」くなっている。そして今彼らのもとめているものは「事実の情報をを用い、理解を深めることを通じ、彼ら自身の内部および世界の出来事を明晰に総括できる精神の資質」——「社会学的想像力」である。(イ)、この「社会学的想像力」によって人は「歴史(history)と生活史(biography)とを、また社会の中での両者の関係をも把握する。」ことが可能になる。この想像力は古典的社会科学者が生き生きと発揮したものであった。(ウ)、そしてこれは具体的には「個人環境(milieux)に関する問題(troubles)」と「社会構造の公的問題(issues)」の区別をその最重要の手段とする。(エ)、ところが「今日」のアメリカの社会学者はかような歴史的構造的視点をもたず「社会分析の知的政治的課題を放棄してしまっている<sup>(1)</sup>。」——そこでミルズは二章～四章でアメリカ社会学の「不幸な諸傾向」を検討していったわけである。

さてミルズの社会学的想像力についての言及を簡単に要約すると以上のようになるが、次にこれを分析的に整理してゆくことにしたい。(ア)～(ウ)をみてゆくと、そこに出てくる諸々のタームが2つの相対するグループにわけられることがわかる。その第一は「大状況」とも言うべきものであり、その第二は「小状況」と呼ぶべきものである。(ア)では「全体社会構造のさまざまな変化」「巨大



な歴史状況」「世界の出来事」などを「大状況」として、「一般の人々の世界」「彼ら自身の内部」を「小状況」として見ることができる。また(4)では「歴史」が「大状況」,「生活史」が「小状況」である。そして(5)では「社会構造の公的な問題」が「大状況」,「個人環境に関する問題」が「小状況」である。ところがさらに別の角度から分析してみるならばこれらの用語がそれぞれ「歴史」「構造」「環境」「問題」に関する対立概念であることがわかる。すなわち「生活史」「歴史」は「歴史」に関するものであるし、「公的問題」と「個人的問題」は「問題」に関するものである。また「環境」については「小環境 (milieux)」の対立概念は別のところで「環境」(environment)とあらわされている。そして「社会構造」の対立概念は『性格と社会構造』における「性格構造」にもとめることができる。これらは「構造」に関するものである。同書から類似の概念として「機能」的役割に関する「個人的役割」と「制度的役割」を見出すことができる。またさらに別の論文<sup>(2)</sup>に目をむけるならば「社会研究の二つのスタイル」として「巨視的」と「分子的」の二つが区別されている。そして「記号論」の地平において前者が「統語論」的側面を重視し、後者が「意味論」的側面を重視するものとされた。ここに「記号論」「研究のスタイル」との関連においても上でいった対立概念が存在することになる。等々……。これらの対立概念が「個人と社会」という視座を基軸とするものであることは言うまでもない。以上のべたことを表にして整理すると下のようになる。

	問 題	環 境	研 究 スタイル	記 号	歴 史	構 造	機 能
大状況 (社会)	issue	environ- ment	macro- scopic	syntax	history	social structure	instituti- onal role
小状況 (個人)	trouble	milieux	more- cular	semantics	biography	character structure	personal role

このように見てくると「社会学的想像力」とはこの表の各項——すぐれて社会学的ファクター——を縦横にむすびつけ、相互連関的にとりあつかうことのできる精神の資質、それによって身にふりかかる問題を公的問題に転化し、社

社会問題として批判的対象化を行なう精神の資質として理解される。そしてまた「誇大理論」「抽象化された経験主義」等は、問題を解消するために、イデオロギー的に継横に限定をするものとして批判されうるのではないだろうか。

(2). それでは何故社会問題を解消する立場のアンチテーゼが「社会学的想像力」になるのか、次にこれを考えてゆくことにしよう。

上で「社会学的想像力」はミルズによってさまざまなしかたで定義されていた。しかしすでに見たようにそれらは「大状況」と「小状況」を相互連関的に媒介する精神の資質であるという一点に集約されるものであった。だが上でいった他にミルズは全く別のしかたでこれを規定している。そしてこの部分が上記の問題を解決する手がかりとなる部分である。——そこでミルズは現代人が「永遠の異邦人としてではなくとも、すくなくともアウトサイダーとして」(傍点筆者)の自己意識をもっていることに注目する。しかし彼はこのような自己意識が「同化された実感 (absorbed realization)」(傍点筆者)に根ざしており、生産的でないとし、これに対して「社会学的想像力」を「この自己意識のもっとも生産的な形式<sup>(3)</sup>」と規定している。

それでは彼の言う「自己意識」とは何だったのか。これを解明するために彼の「自己意識論」についてふりかえてみよう。G. H. ミードは「自己意識」を自分のことばに対する他者の反応を自分自身の中に反射して経験するという「反省的知性」(Reflexive Intelligence) としてとらえていた<sup>(4)</sup>。すなわち自己意識は他者の態度を集約し、抽象化し、内面化、役割取得することをおして獲得される。ミルズは「言語、論理、文化」の中でこの「思考過程」(Reflective Process) について検討した。そしてミードの見解を継承しながらも、かような他者、一般化された他者はミードの言う如く全体社会をつつみこむものではなく、選択された社会的部分、内面化された会衆であるという修正をほどこした<sup>(5)</sup>。そして「会衆」の概念は「制度」「秩序」等とむすびあわせられ性格と社会構造における制度的社会構造の理論、制度の社会心理学へとねりあげられていったのである。そこにおいて「自己意識」は制度的社会構造によって与えられる役割を取得することによって獲得される「自己のイメージ」であった<sup>(6)</sup>。

だがミルズにとってそうした自己のイメージは社会的現実 (reality) をしっかり反映した「確固とした事実の世界<sup>(7)</sup>」における自己のイメージではなかった。自己のイメージはそのような「実像」ではなく、「現実」についての「公式見解」にもとづく「セコハンの世界<sup>(8)</sup>」における自己のイメージ、すなわち「虚像」だったのである<sup>(9)</sup>。——ミルズはこのように制度化され社会構造の中にくみこまれたものとして自己意識をとらえている。

以上のようにミルズによれば「現代人」すなわち大衆の自己意識は社会的現実 (reality) の実感 (realization) に枢ざした生産的な自己意識ではなく、巨大な社会制度の中に同化したものだった。——大衆はただマスメディアをつうじての「現実」についての公式見解をたよりにするばかりである。したがって自分の身のまわりでどんな障害がおこっても、歴史的、社会的な大状況との連関においてそれを理解する (realize) することはできない。大衆すなわち「陽気なロボット」がそうした障害に不安をいだくことがあっても、公式見解によって——公的問題に転化されえず——解消されてしまうのだ。かくして大衆は自らを重要な諸問題についてなんらの決定権ももたぬアウトサイダーとして意識し、眼前でくりひろげられるセコハンの絵図をただながむのみである。そしてそこには異邦人の目のもつ批判性のかけらもありはしない。

ミルズはなんらの問題も解決できぬ大衆の自己意識の非生産性を以上のようなものとしてとらえていた。そしてそれがゆえ問題を解決するような生産的自己意識として社会学的想像力が導入されたのである。何故ならばそれは「現実」についての公式見解、同化された実感に根ざしたセコハンの世界における自己の「虚像」をふりはらい、事実をつみあげ—Craftsmanship!—一個人と社会、生活史と歴史をむすびつけることにより個人的障害を社会問題転化(≡異化)<sup>(10)</sup>するような、そして確固とした事実の世界における自己の実像を形成するような *imagi-nation*, イメージ形成の能力たる想像力であったからだ。——ミルズは言う、社会学的想像力を「行使することにより、制約された軌道の上だけで思考をすすめてきたにすぎぬような人々が、それまではなんとなくすみなれたものと思いこんでいた家の中で突然眼がさめたと感じるようになることが多い……。かつては健全にみえた古い決定が今となっては途方もなく愚かな精神

の所権と思われてくる。驚くという能力が再度いきいきよみがえる。かれらは新しい思考の様式を獲得しているものであり、価値の転換を経験している<sup>(11)</sup>と。

- (1) S. I. p.p 3~24.
- (2) Mills "Two Styles of Social Science Research" 1953 P.P.P.
- (3) S. I. p. 7.
- (4) Mead, G.H. *Mind Self and Society* 1934 p.p.90~108.
- (5) Mills "Language Logic and Culture" 1939 P.P.P. p. 405.
- (6) Gerth and Mills *Character and Social Structure* 1953 p.p. 80~98.
- (7) Mills "Cultural Apparatus" 1959 P.P.P. p. 405.
- (8) *ibid.*
- (9) cf. Blum, F. "C. Wright Mills: Social Conscience and Social Values"  
Horowitz ed, *New Sociology* p.p.162~163 p.p.164~167.
- (10) 佐藤毅『現代コミュニケーション論』1976 p. 165 f.
- (11) S.I. p.p.7~8.

#### 四. 総括

以上『社会学的想像力』を中心にミルズの「科学」フェティシズム把握を分析、再構成し、そしてそのアンチテーゼ「社会学的想像力」を分析的に検討してきた。これらをふまえ最後に彼の方法論——社会学的想像力——を総括し、評価してゆくことにしたい。

それにあたりミルズがこれを「文化活動」(cultural life)の公分母として位置づけていることに注目したい。もちろんこれは文化装置のみにない手たる人文、社会科学の公分母としての位置を社会学が占めつつあった——ミルズがそう感じていた——ことと無関係ではない。むしろそれがゆえに社会学者にかくもはげしい批判があびせかけられたのであろう。しかしそこで問題となるのはそういったミルズの政治社会学を貫く「問題意識」はなにかということである。「問題状況」をおもいおこしてみよう。

——アメリカ大不況——それはビジネスの論理（生産制限とビジネスユニオンそして消費者の生産）が支配するアメリカ経済体制の必然的帰結としてヴェブレンが予言したところであるが<sup>(12)</sup>——その不況が1929年はじまった。ルーズベルトのニューディール政策は一定の希望の光をともすにみえたが、たちまちかきけされてしまう。しかし1941年日本軍の真珠湾攻撃による第二次大戦

の本格化とともに失業問題は解消し、生産は増大し、政府支出は格段ののびをみた。ミルズはこのような動きを20年代の繁栄とオーバーラップさせ、「不況—戦争—好況」というアメリカ史のリズムとして感じとったのである。

しかも第二次大戦後、戦時経済は平時経済にもどることなく常態化された。そして戦後の世界に冠たるアメリカ大衆社会——過剰開発社会——はこのような基礎の上にぎすぎあげられたものに他ならなかった。こうして「合衆国がおこなうこととやりそこなうことが世界で何がおこるかの鍵<sup>(2)</sup>」となっていると感じたミルズは、そういった重要な決定を行なうエリートと大衆の問題を明らかにすべく終戦を前後してパワーエリート——労働組合幹部をふくむ——とホワイトカラーについての研究を開始する<sup>(3)</sup>。このように「大衆社会論」も、それを背景とする「社会学批判」も、すぐれて戦時経済の常態化=軍産体制の形成へのにくしみ、人類をほろぼす第三次大戦へのにくしみにうらうちされたものだったのである。

近代西欧社会においてヒューマンイズムの旗手であった「科学・技術」のパラダイム——そしてそれにもとづいた「有効需要創出」の経済学——がヒューマンイズム破壊のイデオロギーと化した今人類共通の価値をまもるために新たなる公分母がもとめられねばならぬ。それは社会学的想像力に他ならない。そのようにミルズは考えた<sup>(4)</sup>。——かくして「公分母」としての社会学的想像力とは、人類史のこのような現況の中で——問題を解消する「問題」解決行動を批判し——問題を解決する自己像を形成する精神の資質。危機を打開するため社会をラディカルに変革する歴史の変革主体という普遍的「歴史」から要請される自己の役割を reflective に取得する「反省的知性」に他ならない<sup>(5)</sup>。そしてこれこそが「社会学的想像力」の本質だったのである。

しかしこのようなミルズのパースペクティブは人間の類的危機感にもとづいたものであると同時に「陽気なロボット」大衆に対する絶望をとまなうものであった。そしてそこから非人間化の状況をながめるとき必然的にうかびあがってくるのは第二の「啓蒙<sup>(6)</sup>」=意識変革の必要性である。そしてはたして社会学的想像力という精神の資質が要請されたのである。だがこのような考え方は非人間的な科学、そして大衆社会の状況に自らのヒューマンイズムを抽象的・絶

対的に対立させることに他ならない。かくして humanism は Humanism と化し、いわば「人間神論<sup>(7)</sup>」とも言うべき限界性がうかびあがってくる。——このようにミルズの「科学」フェティシズム論の限界は現状の Science に頭から他の Science を対立させることなく社会的文脈の中でその限界性を究明せんとするものの、社会的文脈を把握するパースペクティブの欠陥のため、Humanism を抽象的・絶対的に対立させるというフェティシズムにおちいっているということである<sup>(8)</sup>。

このようなテオリア<sup>(9)</sup>の立場をアップセーカから「よりどころのない立場<sup>(10)</sup>」と批判されたミルズは、プラクシスの立場、社会学的想像力をになう客観的基礎をもとめて、一方で「マルクス主義者」「アナーキスト」「トロッキスト」といった既成左翼をあらいなおし、他方で観念的に構成した「新しい左翼」に手紙を書き、そして「国際比較社会学」を構想し、自らの組織論を形成しようと新たな努力を開始する。しかし1962年3月20日二度めの心臓発作が彼をおそい彼は永遠にかえらぬ人となった。未完のまま残された仕事をわれわれの手にたくして。

- (1) Veblen, *Absentee Ownership* op. cit.
- (2) ミルズ『新しい権力者』前掲訳書 p.9
- (3) 40年代これらの仕事がすでにはじめられていたことについては Gillam, Richard *The Intellectual As Rebel: C. Wright Mills 1916-1946* unpublished MA essay Columbia Univ. 1966。また1941年には『性格と社会構造』モデルが完成していたことについては Jones Ph. D Dissertation op. cit. 参照。
- (4) S.I. p.p. 13~18.
- (5) 厳密には「反省」と「想像力」は概念的に区別される。すなわち前者が存在批判的媒介を行なうもの、後者が存在超越的媒介を行なうもの。しかし後者の表象機能は、ステレオタイプが蔓延する非人間的社会にあって、前者の作用をなすために不可分のものとなっている。ここではそうした人間的知性=反省的知性と解し、こうした記し方をした。(詳細は稿をあらためねばならない。)
- (6) ホロヴィッツはミルズを啓蒙主義者として評価している。Horowitz, "The Sociological Imagination of C. Wright Mills: in Memoriam" *The American Journal of Sociology* Vol. LXVIII No. 1 1962.
- (7) Feuerbach, R *Vorläufige Thesen zur Reformation der Philosophie* These 35・36・43 od. *Grundsätze der Philosophie der Zukunft* § 38.

- (8) こうしたミルズの欠点を想像力論の地平にひきつけてあらかずなら、非人間的なステレオタイプと人間的想像力の絶対的対立ということになる。筆者はこの理論的難点を想像力のタイポロジーという形で打開しようとしている。(本稿一の注(1)参照)
- (9) マルクス「フォイエルバッハテーゼ」第一テーゼ。佐藤春吉「“啓蒙主義”批判とマルクス——フォイエルバッハテーゼ理解を手がかりとして——」平子友長「マルクス経済学批判の方法と形態規定の弁証法」岩崎允胤編『科学の方法と社会認識』1979 広松渉『マルクス主義の地平』真木悠介『現代社会の存立構造』
- (10) アップセーカー・H『ライトミルズの世界』(陸井三郎訳1963)。ミルズがこのような立場におちいったのをハワード・プレスの言う如くアメリカ労働運動への絶望に還元することには疑問がのこる。他方でミルズの中にあつた伝統的・主知主義の残基が影響をもっていることは否定できないからである。(Press, H C. *Wright Mills* 1978)

(追記) 本稿は修士論文として提出予定の『反省と想像力——ライトミルズと想像力の知識社会学——』第Ⅱ部第五章第二節～第四節および第Ⅲ部第一章第三節の草稿に加筆・修正をくわえたものである。

(筆者の住所：国立市中2-19-21 平塚荘)